日蓮聖人における薬王品十喩の解釈について

高森大乗

一、はじめに

日蓮聖人の遺文において、譬喩・例話・説話・因縁・故事・史実等の説示から「下種」や「常没」などの語句に至るまでを全て「譬喩」という表現の範疇に包括するならば、その用例は遺文中の随所に散見される。これは「譬喩」なるものの特性を聖人が明確に認識されていた証である。

修辞学において「比喩」とは、本義すなわち表現対象（たとえられるもの）と、喩義すなわち比喩対象（たとえるもの）との間の類推または連想によって成立する弁証法で、これによって文章に特殊な感情効果を与える表現方法を意味するものである。「比喩」に関する最近の研究としては、国立国語研究所の現代語研究の一環としての考察がある。国文学者で文体論を専攻している中村明氏は、その著書『比喩表現辞典』において「比喩とは、表現主体が、表現対象を、それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで、その代わりに、言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し、その言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性などで、受容主体の想像力を刺激して、両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である。」[1]と定義している。すなわち「比喩」とは、「表現主体」（送り手・話し手・書き手）が「受容主体」（受け手・聞き手・読み手）に対して、「表現対象」（たとえられるもの・本義・伝達内容）を「それを過不足なく直接にさし示す言語形式」（直接的表現）ではなく「他の事物・事象に対応する言語形式」（たとえるもの・喩義・間接的表現）を通じて伝達する手段であり、その表現の違和感や意外性によって受容主体の感性を刺激し、

本義と喩義の相互間における類似性・対比性・関連性などによる結びつきを連想させることで間接的に伝達する表現方法であると規定するのである。

一方、仏教における「譬喩」は、十二部経中の梵語「阿波陀那」の訳がこれに当たり、譬または喩と称され、その意義は難解な教説や法義を平易かつ明解な実例または類似の事物に例比・仮託して説明する手段あるいは方便であると定めることができる。また「譬喩」は、単に伝達すべき教えの主旨や本義を日常的かつ現実的な例話に引き合わせて平易に説き明かすことを目的とした表現法であるばかりでなく、聞き手あるいは読み手の感性に訴えて、これをして随喜・信解せしめる効果を有している。法華経方便品で五仏章を説く中において、如来は諸根の利鈍・衆生の本性や欲性・深心の所著・心の所念・所行の道・先世所習の善悪の業などにしたがって、種々の因縁・譬喩・言辞・方便および九部法をもって随宜に諸法を演説し、また一切をして歓喜せしめると説かれているが、[2] この所謂「言辞柔軟悦可衆心」の功徳は「譬喩」の最大の特性であると言える。天台大師が『法華玄義』六上において「阿波陀那者(トハ)与(メニ)二世間(ノ)一相似尋(シテフ)二軟浅語(ノヲ)一。」[3] と説かれ、『法華文句』五上において「先(ニ)総釈。譬(トハ)者比況(ナリ)也。喩(トハ)者暁訓(ナリ)也。託(シテ)レ此比(ニシ)レ彼、寄(セテ)レ浅訓(ニユ)レ深(ヲ)。(中略)動(シテヲ)レ樹訓(ヘヲ)レ風、挙(テヲ)レ扇喩(ヘヲ)レ月、使(テ)二其(ヲシテ)悟解(セ)一。故言(ニフ)二譬喩(ト)一。別釈者、以(テ)二世法(ヲ)一比(ス)二出世法(ノニ)一。因(テ)二於曾有(ニ)一聞(キ)二未曾有(ヲ)一、踊躍歓喜(ス)。」[4] と示されるのは、このことを意味する。即ち、「譬喩」は読み手のあるいは聞き手の心の中に具象化されたイメージを沸き立て、物事の深義を多少なりとも理解できたという感動を呼びおこし、時には釈尊の内証を共有できたという随喜の気分を目覚めさせるものである。難解な講釈のみに頼るよりは、簡にして要を得たる「譬喩」の方が人々に感銘を与える効果をもっている。その時、「譬喩」は生きた言葉となって受け手の心に染みいって信仰的感動を与え、説かれるところの教えとともに信受されていったのである。

このように、「譬喩」は難解な法門を易解な事象をもって説明する手段であり、日蓮聖人においては末代愚痴の凡夫と難信難解の仏法とを結ぶ懸け橋であったことがうかがえる。また換言すれば、一念随喜・但信無解の「信」を起こせしめるのに必要な手段として用いられたのが「譬喩」であるとも言及できる。日蓮聖人が法華経の教理あるいは法華経に依った自身の思想を説明するにあたり、これらの「譬喩」を用いられた背景には、「譬喩」

の属性たる聞法歓喜の効能に着目されたからと拝察できる。従って、聖人遺文における「譬喩」を考証することは、単に日蓮聖人教学を再認識するのみでなく、聖人の檀越教化の一面を垣間見る手段ともなりうると思われるのである。今回の考察では、法華経の譬喩の中でも薬王菩薩本事品の十喩に焦点を絞り、台当教学における解釈の同異を探るとともに、日蓮聖人が自身の内証の法門をいかに弟子や檀越に教示されていったのかを考察してみたい。

二、天台教学における薬王品十喩の解釈

法華経には総別二喩以外にも数多くの譬喩や故事が説かれており、これが譬喩経と呼ばれる所以ともなっているのであるが、その中でも薬王菩薩本事品には法華最第一なることを譬えた歎法体の十喩と、法華経の抜苦与楽の利益を唱えた歎法用の十二喩とが説かれている。前者は十種称揚とも言われ、法師品の已今当三説超過が縦に法華経の最尊なるを示すのに対し、横に法華経の最上なるを説示するものである。[5] 具体的には、諸水の中に海第一なるが如く（第一喩・水喩）、衆山の中に須弥山第一なるが如く（第二喩・山喩）、衆星の中に月天子第一なるが如く（第三喩・衆星喩）、日天子の諸闇を除くが如く（第四喩・日光喩）、諸王の中に転輪聖王第一なるが如く（第五喩・輪王喩）、三十三天の中に帝釈天第一なるが如く（第六喩・帝釈喩）、大梵天王の一切衆生の父なるが如く（第七喩・梵王喩）、一切凡夫の中に五仏子第一なるが如く（第八喩・四果辟支仏喩）、一切の無学の中に菩薩第一なるが如く（第九喩・菩薩喩）、仏の諸法の王なるが如く（第十喩・仏喩）、この法華経も諸経の王であることを説く。[6]

この薬王品十喩について天台大師智顗は、別表によって明らかなように、『玄義』『文句』両部において解説を加えられている。『玄義』の十喩釈の結びに、

> 引諸譬喩明教相最大。例知用宗体名亦大。如海。境智乃至利益亦大。如海。教相如山、在四味教上。用宗体名境智利益亦復如是。教相盈虧円満如月。用宗体名境智利益亦復如是。教破化城。用宗体名境智利益亦復如是。教相自在。余亦如是。教相王中王。余亦如是。[7]

と示されるごとく、教相の比較において十喩を位置付けるのが天台の立場であり、五重玄義ならびに迹門十妙が悉く絶妙なることをもって法華の独勝を明かされるので

ある。なお第八喩の「有三能受二持是経典一者亦復如レ是、於二一切衆生中一亦為第一。」(8)の文は、後に日蓮聖人によって重視されるところとなるのであるが、天台大師においては何の解説も為されていないことを付しておく。次に妙楽大師湛然の『法華文句記』『法華玄義釈籤』における十喩釈についてであるが、妙楽は天台の語句の解説に始終しており、しかも十喩全体を扱ってはいないのでここでの考察は省略することとした。

薬王品十喩を論ずる上で看過できないのが、伝教大師最澄『法華秀句』所説の「仏説十喩校量勝」(9)である。伝教は経文と『玄義』の釈を対照して引用され、別表に示したごとく、十喩各々について爾前・法華の勝劣および他宗と天台法華宗の勝劣に関する見解を示されている。殊に、第八喩に関しては、天台・妙楽が釈されなかった持経者第一の義を前面に押し立てて、法華宗の優勝性を明かされている点が注目に値する。

このように天台・伝教の十喩釈を概観してみると、両者の相違は、天台が十喩を通じて法華経の爾前経に対する超勝を説いたのに対し、伝教は法華宗の他宗に対する優位性を唱えた点にあるといえよう。つまり、天台の解釈は所依の「経」そのものの勝劣判に立脚し、伝教の解釈は経を弘める能依の「宗」の勝劣判に立脚していたのである。これは、天台と伝教では破折の対象と目的が異なっていたためと推察できる。すなわち天台の破折の対象が南三北七や法雲ら涅槃学派・成実学派・華厳学派の提唱する教判そのものであって、その目的が法華経を仏教哲理の究竟と位置付けることにあったのに対し、伝教の破折の対象は徳一に代表される既存の南都六宗の宗(衆)の存在それ自体であり、破折の目的が他宗を凌駕する天台法華宗の、国家による公認にあったことが理由と思われるのである。南都僧綱から独立した大乗菩薩戒壇の建立も、国家権力に迎合し僧綱の統制下に置かれた南都六宗の非主体性に対する反発から提唱されたものであったと受け取るとこができる。こうした一宗の独立と公認という大目的が、薬王品十喩釈にみられる伝教の諸宗破折の姿勢に影響を与えていたと言えよう。伝教大師において第八喩の持経者第一の解釈がなされるのもそのためと思われる。このように考えると、伝教の立場は後述する日蓮聖人の立場に近いものがある。しかし基本的には天台・伝教とも「法華経最為第一」という薬王品所説の元意に忠実に釈されており、その内容も第八喩の持経者第一に関する解説の有無を除けば大差はない。とこ

ろがこの一文は、日蓮聖人においては大きな意味を持っていたようで、やがて教義上画期的な解釈がなされるに至ったのである。この点について次に述べてみたい。

三、日蓮聖人における薬王品十喩の解釈

(一) 経の勝劣判に観る薬王品十喩の用法

薬王品十喩の主題が、爾前法華の勝劣を決するにあることは先述の通りである。聖人も当然この意義に着目され、遺文中に頻繁に引用されている。但し十喩全体を引用された例は、弘安元年の『秀句十勝鈔』[10]に伝教の『法華秀句』下の「仏説十喩校量勝」の文を引かれた部分に見られるだけで、多くの場合は二、三の喩を挙げて他を省略するかたちを取る。省略したからと言って、十喩そのものが譬える法華最勝の譬意は損なわれるものではない。

まず正元元年の『守護国家論』では十喩中の第一喩を抜粋して、

仏挙二十喩一。其第一喩以二川流江河一譬二四十余年諸経一、以二法華経一譬二大海一。末代濁悪無慚無愧大旱魃之時、四味川流江河雖レ竭、法華経大海不二減少一等説了、次下正説云、我滅度後後五百歳中広宣流布於二閻浮提一無レ令二断絶一定了。[11]

と叙述される。諸水の中で大海第一なる理由を旱魃（末法）においても不滅であることになぞらえて、これをもって法華経の末法為正の証文とされるのである。

また文永二年の『薬王品得意抄』には、第一喩から第四喩までを引用して法華経の超勝なることを詳細に解説されている。まず第一喩の諸水と大海については、

此品有二十喩一。第一大海譬。先第一譬粗可レ申。此南閻浮提ニ二千五百河。西倶耶尼五千河。総此四天下二万五千九百河。或四十里・乃至百里・一里・一町・一尋等有也。雖レ然此諸河総深浅事不レ及二大海一。法華已前之華厳経・阿含経・方等経・般若経・深密経・阿弥陀経・涅槃経・大日経・金剛頂経・蘇悉地経・密厳経等、釈迦如来所説之一切経、大日如来所説之一切経、阿弥陀如来所説之一切経、薬師如来所説之一切経、過去現在未来三世諸仏所説之一切経之中法華経第一也。譬如二諸経大河・中河・小河等一。法華経如二大海一等説也。[12]

と説かれ、更に「勝レ河大海有二十徳一」と大海の十徳をもって説明を加えられて、[13]法華の経力・力用が爾前諸経を凌駕する旨を明かされている。

次に第二喩の衆山と須弥については、

第二譬レ山。十宝山等者山中須弥山第一也。十宝山者一雪山・二香山・三軻梨羅山・四仙聖山・五由乾陀山・六馬耳山・七尼民陀羅山・八斫伽羅山・九宿慧山・十須弥山也。先九山者諸経諸山如。但一一財。須弥山衆財具勝二其財一。例如二世間金不レ及二閻浮提金一。華厳経法界唯心・般若十八空・大日経五相成身・観経往生、法華経即身成仏勝也。須弥山金色也。一切牛馬人天衆鳥等此山依必失二本色一金色也。余山不レ爾。一切諸経法華経依失二本色一。例如下黒色物値二日月光一失上レ色。諸経往生成仏等之色値二法華経一必無二其義一也。(14)

と、須弥山を閻浮提金に比せられて、衆生の失本色をもって一切衆生悉皆成仏の譬説とされ、一切経の失本色をもって三乗方便一乗真実の譬説とされており、これをもって法華の即身成仏の優勝性を主張されている。

更に第三喩の星と月の喩に関しては、まずこれをやはり法華最第一の文証として挙げ、

第三譬レ月。衆星ハ或半里・或一里・或八里・或十六里不レ過。月八百余里也。衆星雖レ有レ光不レ及月。設百千万億乃至一四天下三千大千十方世界衆星集レ之、不レ及二一月光一。何況一星可レ及二月光一乎。華厳経・阿含経・方等・般若・涅槃経・大日経・観経等一切経集レ之、法華経不レ及二一字一。一切衆生心中見思・塵沙・無明三惑竝十悪五逆等業暗夜ごとし。華厳経等の一切経闇夜星ごとし。法華経闇夜月ごとし。法華経信深不レ信者、半月如レ照二闇夜一。深信者満月如レ照二暗夜一。無レ月但有レ星夜強力ノ者・カタマシキ者ナムトハ行歩ストイヘトモ、老骨ノ者・女人ナムトハ行歩に不レ叶。(15)

と述べられて、「闇夜」を三惑十悪五逆、「星」を爾前経、「月」を法華経、「強力ノ者」を正像の行者、「老骨ノ者」を末法の衆生に譬えられる。そして満月の夜には老人・女人ですらも自在に夜道を歩くことができるように、法華経は二乗・悪人・女人の成仏を説いて、末法のすべての衆生を救済する力用のあることを付け加えられている。

更に続けて、

又月よいよりも暁ハ光まさり、春夏よりも秋冬ハ光アリ。法華経正像二千年よりも末法殊可レ有二利生一。(中略)次下文云、我滅度後後五百歳中広宣流布於二閻浮提一無レ令二断絶一等云云。此経文二千年後南閻浮提広宣流布すべしととかれて候は第三月譬の意也。

此意根本伝教大師釈云、正像稍過已末法太有レ近。
法華一乗機今正是其時等云云。正法千年像法千年法華経利益諸経可レ勝レ之。雖レ然月光自二春夏正像二千年一至二末法秋冬一如レ勝レ光。(16)

と、ここでは四季の月光を正像末に配し、秋冬（末法）の月（法華経）をもって後五広布の意に解され、法華経の末法為正を主張される。諸経の王たる法華経の末法流布の必然性を断言せられているのである。このように聖人は単に法華最勝の譬意だけで薬王品十喩を引用されたばかりでなく、『守護国家論』の第一喩釈でも見たように、十喩の主旨である法華最勝の義を通じて、末法に弘まるべき法が何であるかを繰り返し重説されるのである。

次に第四喩の日と月の喩については、同じく『薬王品得意抄』に、

第四譬日譬。星ノ中ニ月ノ出タルハ星ノ光ニハ勝二月光一、未レ消二星光一。日中非レ消二星光一又月光モ奪テ失レ光。爾前如レ星法華経迹門如レ月寿量品如レ日。寿量品時迹門月未レ及。何況爾前星。夜星時月時衆務不レ作。夜暁必作二衆務一。爾前・迹門猶生死難レ離。至二本門寿量品一必可レ離二生死一。(17)

と、三光をもって前迹本の勝劣の次第を明かされている。すなわち「星」を爾前経、「月」を法華迹門、「日」を法華本門に譬え、権実相対・本迹相対を判じられるのである。作務の義は行者の断惑証理に約すもので、昔迹本における分段・変易生死の離不離をもって法華の超勝を論じるものである。(18) このように、聖人は薬王品十喩を引用して法華の超勝性を唱えると同時に、十界皆成・即身成仏・生死離脱等の各面からその正当性を裏付けられ、更にそれらを総括して法華経の末法流布の必然性を強調されているのである。

このほかにも文永三年の『法華題目鈔』には、

過去の七仏千仏・遠遠劫の諸仏の所説、現在十方の諸仏の諸経も皆法華経の経の一字の眷属也。されば薬王品に仏宿王華菩薩に対して云、譬如二一切川流江河諸水之中海為第一、衆山之中須弥山為第一、衆星之中月天子最為第一等云云。妙楽大師釈云已今当説最為第一等云云。此経の一字の中に十方法界の一切経を納たり。(19)

と、第一・第二・第三喩を引いてこれに三説超過の説を加えられ、一切経は法華経の「経」の一字の眷属であると述べられている。三説超過と十喩称揚の関係は以前に述べた通りであり、日蓮聖人もその義で両者を併せて引

かれたものと推察できる。いずれにせよこれらの事実から、法華最第一とは取りも直さず法華経が諸経を摂取・包含・具足することを意味するものと見なすことができよう。

以上のように、日蓮聖人は天台や伝教の解釈と同様、薬王品の十喩を法華最勝の証文とされ、時には末法為正の根拠として用いられたことが分かる。ここでは佐前の遺文に限っての考察であったが、佐後の遺文にも同様の義はしばしば説かれており、[20] このことは法華最勝の十喩釈が聖人の御生涯全体を通じて一貫したものであったことを窺わせるのである。

(二) 人の勝劣判に観る薬王品十喩の用法

さて、聖人は法の勝劣を論ずる場合に薬王品の十喩を引用される一方で、人すなわち行者の勝劣を比較される場合にもしばしばこれを用いられている。つまり、それは第八喩所説の「有能受持是経典者亦復如是於一切衆生中亦為第一。」の経文に根拠を得た解釈である。この見解は、佐渡流罪を経て法華経行者としての自覚が高まった時期を契機に遺文中に活かされるようになり、その初見は、文永九年の『真言諸宗違目』に確かめられる。

法華経云又如大梵天王一切衆生之父。又云此経○諸経中最為第一。有能受持是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。(中略)星中勝月星月之中勝日輪。小国大臣下大国無官傍例也。外道得五通仏弟子小乗三賢者未得一通天地猶勝。法華経之外諸経大菩薩下法華名字即凡夫。何汝始驚之乎。依教定人勝劣。先不知経勝劣何論人高下乎。[21]

ここでは、第七喩の梵天の譬え、第八喩の持経者第一の文、第三喩の月の譬え、第四喩の日の譬えを順に挙げて、諸経の菩薩は法華の名字即の凡夫にも劣ると叙述され、経の勝劣を知ればこそ人の勝劣も定まることを説かれている。ここに略引される薬王十喩は第八喩を取意したものと考えられる。

あるいはまた文永一二年の『大田殿許御書』では

法華経第七云有下能受持是経典者上亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。此経薬王品挙十喩超過已今当一切経云云。第八譬兼有上文。所詮如仏意者非詮経之勝劣。法華経行者勝一切之諸人之由説之。大日経等行者諸山・衆

星・江河・諸民也。法華経行者須弥山・日月・大海等也。[22]

と示されている。ここでは「第八譬兼有上文」とあるがごとく法華行者を称歎した第八喩が他の九喩にも一々あるべき旨を明言されている。更に同年の『四条金吾殿女房御返事』においても、

十喩は一切経と法華経との勝劣を説せ給と見えたれども、仏の御心はさには候はず。一切経の行者と法華経の行者とをならべて、法華経の行者は日月等のごとし、諸経の行者は衆星灯炬のごとしと申事を、詮と思めされて候。なにをもんてこれをしるとならば、第八の譬への下に一の最大事の文あり。所謂此経文云、有三能受二持是経典一者亦復如是。於二一切衆生中一亦為第一等云云。此二十二字は一経第一の肝心なり。一切衆生の目也。文の心は法華経の行者は日月・大梵王・仏のごとし、大日経の行者は衆星・江河・凡夫のごとしととかれて候経文也。[23]

と断言せられている。すでに第八喩のみならず、十喩全体が教経勝劣の意から行者勝劣の意へとその意義を転換されている点は注目に値する。

同様の解釈は、建治元年の『撰時抄』にも見られる。[24]

そこではやはり「有三能受二持是経典一者亦復如是。於二一切衆生中一亦為第一。」の文を引かれた後で、華厳経の行者たる普賢・解脱月・龍樹・馬鳴・法蔵等、解深密経・般若経の行者たる須菩提・嘉祥・玄奘等、真言宗大日経の行者たる善無畏・金剛智・不空等、涅槃経の行者たる迦葉・法雲・南三北七の十師等を挙げて、これらのどの諸師よりも、

末代悪世の凡夫の一戒も持たず、一闡提のごとくに人には思たれども、経文のごとく已今当にすぐれて法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて、而も一分の解なからん人々は、彼等の大聖には百千億倍のまさりなりと申経文なり。（中略）されば今法華経の行者は心うべし。譬如二一切川流江河諸水之中海為第一一持二法華経一者亦復如レ是。又如二衆星之中月天子最為第一一持二法華経一者亦復如レ是等と御心えあるべし。当世日本国の智人等は衆星のごとし、日蓮は満月のごとし。[25]

と示されている。四〇名近い菩薩大聖を列挙して、但信無解の法華経の行者は彼らの百千億倍も勝れたりと断ぜられる文句は圧巻である。「一戒も持たず、一闡提のごとく」（無戒・無信）かつ「一分の解なからん」（無解）

の末代悪世凡夫を逆縁謗法無智の悪人と定め、そのような中で法華経を「強盛に信じ」ることのできる有信無解、信力故受念力故持の分際は、まさに諸水の中の大海、衆星の中の月天子であると断言せられるのである。[26] また、経文には「如諸水之中海為第一 此法華経者亦復如是。」[27]「如衆星之中月天子最為第一 此法華経者亦復如是」[28]とあるところを「此」の一字を意図的に「持」に置き換えて、これらの譬喩が法華経の持経者についての勝劣判であると見なされている点は興味深い。これもまた、『四条金吾殿女房御返事』に「一の最大事の文」「一経第一の肝心」「一切衆生の目」と定められた第八喩中の二十二字が、薬王品十喩のすべてに共通の理念として解釈されていることの証と言える。

このほかにも建治二年の『松野殿御消息』には、

法華経薬王品云、有能受持 是経典者亦復如是於一切衆生中亦為第一等云云。文の意は法華経を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・転輪聖王・乃至漢土日本の国主等にも勝れたり。何況や日本国の大臣・公卿・源平の侍・百姓等に勝たる事申に及ばず。女人ならば嬌尸迦女・吉祥天女・漢の李夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説れて候。[29]

とあり、また同じく建治二年の『報恩抄』にも、

法華経の第七云、有能受持 是経典者亦復如是。於一切衆生中亦為第一等云云。此経文のごとくならば、法華経の行者は川流江河の中の大海、衆山の中の須弥山、衆星の中の月天、衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり。[30]

と示されるように、十喩を行者の勝劣判の文証として引用される傾向にあり、佐後における十喩引用の特徴として挙げられる。[31] そもそも譬喩は随他意的な方便の説であり、機により時により応変する性質を有しているものであるから、聖人の内証が佐渡流罪を機に深化すれば、当然その用法も一変して然るべきなのである。譬喩に限らず、経文や説話の引用の姿勢にもこの特徴は確認でき、日蓮聖人がいかに柔軟に仏説や教理に対する理解をもたれていたかを知ることができよう。

四、むすびにかえて

以上のように、日蓮聖人においては薬王品の十喩を人と法の勝劣といった二面性で活用されていたようである。

十喩の経中の元意が爾前法華の勝劣を述べたものであるから、経が最勝であれば第八喩所説の如く必然的に経の行者も最勝であるわけで、その意味では聖人の用例は経文の意図するところに忠実であったと言える。また聖人が主に法華経の本文のみを引かれており、『玄義』『文句』『秀句』等の十喩釈には触れられていないことも重要な特徴として挙げらる。これらの事実から十喩引用の意義について考察してみると、薬王十喩は経典所説の法華最勝の元意に則って引用されたことが明らかであり、これは人師の解釈に基づかずに法華経のこころを素直に受けとめようとされた聖意の現れと看取することができる。あるいは天台・伝教らの釈義を踏襲しながらも末法の今という時代に立ってこれらを再び咀嚼しなおし、自らの内証と重ね合わされて、法華経に説かれる釈尊の御心を読まれたものと拝受することもできる。特に佐後においては、聖人の行者意識の高揚とも関連してか、第八喩の二十二字をもって行者最勝の証文とされるに至っている。度重なる法難を経て、聖人は十喩を経の浅深ではなく人の高下を判釈する物差しとして捉え直されたのである。法華最勝なるが故に末法名字即凡夫の行者が最勝であり、その行者の出現と受難色読によって再度法華最勝が立証されるという構図のなかで薬王品十喩が位置付けられている。かくして、佐前においては教弥実位弥下なるが故に末法為正たることを表顕した薬王品十喩が、佐渡流罪を経て教弥実位弥下なるが故に行者最勝であるという理念に集約され、これをもって日蓮聖人は法華経に明かされる救済の世界をこの末法に具現する導師が誰であるかを披瀝されたのである。

註

(1) 『比喩表現辞典』三一頁（角川書店）。また氏によれば、「比喩」は抽象的なものを具体化し不可視なものを視覚化する方法であり、「比喩」には未知の事柄を「伝達」する場合と既知の事柄を「強調」する場合とがあるという（同書、一〇頁）。

(2) 『開結』一〇〇、一〇二、一〇三、一〇四、一〇七、一一八頁

(3) 『正蔵』三三巻七五三頁b

(4) 『正蔵』三四巻六三頁b

(5) 河村孝照『法華経概説』（国書刊行会）二〇七頁。高橋智遍『法華経概説』（獅子王学会）二七九頁参照。なお、「十喩」の名数は、妙楽の『法華玄義釈籤』（『正蔵』三三巻八二七頁b）と慧沼の『法華玄賛義決』（『正蔵』三四巻

八五八頁c）に確認されるのみで、管見の限り『文句』『玄義』には見られない。天台においては「十譬」と命名されていたようで、これは『玄義』（『正蔵』三三巻六八四頁b）に確認される。また吉蔵の『法華義疏』（『正蔵』三四巻六二一頁b）にも「十譬」の名数がある。

(6) 『開結』五二二～五二四頁。なお日蓮聖人は『秀句十勝鈔』において「海山月日梵王仏全喩。輪王帝釈五仏子菩薩分喩。」（『定遺』一三六八頁）と説かれ、第一・二・三・四・七・十喩は比較対象の領域が広い「全喩」、第五・六・八・九喩は比較対象の領域が狭い「分喩」と定められる。

(7) 『正蔵』三三巻六八四頁c

(8) 『開結』五二四頁

(9) 『伝教大師全集』第三巻、一四～一八頁

(10) 『定遺』二三六七～二三七一頁

(11) 『定遺』一〇二頁

(12) 『定遺』三三七頁。二千五百河については『録内啓蒙』下三四－三五（『日全』七三四頁）に解説あり。

(13) 『定遺』三三八頁。大海の十徳については『録内啓蒙』下三四－三六（『日全』七三四頁）に解説あり。なお『注経』にもこの十徳の引用がある。（『定本注法華経』四九六頁）

(14) 『定遺』三三八～三三九頁。十宝山については『録内拾遺』七－二八（『日全』三七四頁）、『録内啓蒙』下三四－三七（『日全』七三五～七三六頁）、『録内扶老』一三－三一（『日全』七三七頁）に詳しい。なお『扶老』には「須弥山金色也」の文以前を相待妙、以後を絶待妙と解している。

(15) 『定遺』三三九頁。星月の里数については『録内拾遺』七－二八（『日全』三七四頁）、『録内啓蒙』下三四－三八（『日全』七三五～七三六頁）、『録内扶老』一三－三一（『日全』七三七頁）に詳しい。

(16) 『定遺』三四〇頁。なお『録内拾遺』七－三〇（『日全』三七五頁）、『録内扶老』一三－三一（『日全』七三八頁）には、秋月・冬月等にまつわる和歌を引いている。

(17) 『定遺』三四〇頁

(18) 『録内啓蒙』下三四－四〇（『日全』七三七頁）参照。

(19) 『定遺』三九六頁

(20) 『兄弟鈔』（『定遺』九一八頁）、『立正安国論（広本）』（『定遺』一四六七～八頁）、『千日尼御前御返事』（『定遺』一五四〇頁）、『日眼女釈迦仏供養事』（『定遺』一六二五頁）、『上野殿母尼御前御返事』（『定遺』一八一〇頁）、『南条殿御返事』（『定遺』一八二〇頁）

(21) 『定遺』六四〇頁。『日蓮聖人御遺文講義』一七巻（二〇六～二〇七頁）では「小国大臣」等の文は『玄義』の「譬如下小国大臣来二朝大国失中本位上。雖レ預二行伍一、限外空官。限外空官若大国小臣心膂憑寄、爵未レ高他所二敬貴一。」（『正蔵』三三巻七三九頁b）や『釈籤』の「云二小国大臣等一前三教名為二小国一。（中略）並失二羅漢及地住

等次位之名名失本位。（中略）若円大国凡夫小臣名名字仏。故曰憑寄。」（『正蔵』三三巻八九五頁a）の文意によって『法華秀句』の意を敷衍したものとされる。

(22) 『定遺』八五四頁

(23) 『定遺』八五五～八五六頁

(24) 『定遺』一〇五六～一〇五八頁

(25) 『定遺』一〇五七～一〇五八頁

(26) 『日蓮聖人御遺文講義』四巻（五一八頁）、『録内啓蒙』上一二－七〇（『日全』五七九頁）参照。

(27) 『開結』五二二頁

(28) 『開結』五二三頁

(29) 『定遺』一一三九頁

(30) 『定遺』一二一八頁

(31) このほかにも第八喩の持経者第一の文を引用された遺文として『立正安国論（広本）』（『定遺』一四六八頁）、『富木殿御返事』（『定遺』一八一八頁）等がある。文応元年の『立正安国論』（『定遺』二一九頁部分に相当）に持経者第一の文の引用がないのは、やはり行者意識の有無によるものか。また弘安元年の『秀句十勝鈔』には「日蓮疑云真言宗畏・智・空・法・覚・証與伝教大師末学法華行者四衆勝劣如何。」（『定遺』一三六九頁）と説示された後に薬王品十喩を一々挙げておられるので、この場合も行者勝劣の例証として十喩が用いられたものと理解できる。なお、仮に今回の考証が正しいとすれば、断簡二〇二（『定遺』二九二六頁）および断簡二二三（『定遺』二九三四頁）の系年は龍口法難以降と断定することも可能である。

〔別表〕

十喩	第一喩	第二喩
『妙法蓮華経』薬王菩薩本事品（『開結』五二二～五二四頁）	譬如一切川流江河諸水之中海為第一、此法華経亦復如是。	如土山・黒山・小鉄囲山・大鉄囲山及十宝山衆山之中須弥山為第一、此法華経亦復如是。
『妙法蓮華経文句』（『正蔵』三四巻一四三頁c～一四四頁a）	諸水総一切経。別挙四者、譬乳酪生熟四味教也。此法華教譬醍醐海也。説窮本地為深、遍一切処為大、純明仏法不説余法為鹹、最為深大、其義如是。	土黒鉄囲故非是宝。十山雖宝、或一或二、神龍雑居。須弥四宝所成、純天所住。譬余教説能依十地四十心、或凡或賢或聖。説所依或俗或真或中上。是
『妙法蓮華経玄義』（『正蔵』三三巻六八四頁b～c）	海是坎徳、万流帰故、同一鹹故。法華亦然。仏所証得、万善同帰、同乗仏乗。江湖川流無此大徳。余経亦然。故法華最大也。	山王最高。四宝所成故。純諸天居故。法華亦爾。在四味教之頂、離四誹謗。開示悟入純一根一縁同一道味。
『法華秀句』（『伝全』三巻一四～一八頁）	明知、他宗所依経無有大海徳、唯有法華宗大海深大徳。	明知、此法華者在乳味華厳・酪味阿含・生酥方等・熟酥般若四味教之頂。当知、他宗所依経無有須弥徳、唯有法華宗須弥最高徳。

	第三喩 第四喩	如二衆星之中一、月天子最為第一一、此法華経亦復如レ是。 如三日天子能除二諸闇一、此経亦復如レ是。能破二一切不善之闇一。
為二卑下一。此法華経所レ説諦理常楽我浄。如二四宝所成一。開示悟入者之所依。是故此義最為二高上一。		星月同是陰精、倶於レ夜現。星無二盈虧一、不レ及二於月一。諸経説二権智一不レ得二自在一。此経明二権即実実即権一、盈虧相指不二一一而二一。如レ此説二権智一勝二余経一也。日是陽精、独能破レ闇。諸経明二実智破レ惑、尚不レ及二即レ実而権一。那得レ並二即レ権而実一。故知此経明二実智一、最為二第一一。
		月能盈虧故、月漸円故。法華亦爾。同体権実、故、会レ漸入レ頓故。灯炬星月与レ闇共住、譬下諸経存二二乗道果一与レ小並立上。日能破レ闇故。法華破二化城一、除二草庵一故。又日映二奪星月一令レ不レ現故。法華払レ迹、除二方便一故。
		当レ知、兼但対帯随他意経、未レ有二最照一。他宗所依経但有二照明徳一、無レ有二最明徳一。天台法華宗有二最明徳一、照二無余果已死人一。不レ滅二仏種一成仏故。当レ知、他宗所依経破闇之義未二円満一故、日照二高山一未レ照二幽谷一。雖レ照二幽谷一未レ照二平地一。天台法華宗已照二平地一山谷倶照、故能破二不善闇一。

第五喩

如諸小王中転輪聖王最為第一、此経亦復如是。於衆経中最為其尊。

第六喩

如帝釈於三十三天中王、此経亦復如是。諸経中王。

第七喩

如大梵天王一切衆生之父、此経亦復如是。一切賢聖学無学及発菩薩心者之父。

輪王号令止在四域、釈斎三十三梵号令総上冠下。譬余経説三諦三昧、各不相収不得自在。此経所説以実相入真、決了声聞法、是諸経王。

輪王於四域自在、釈王於三十三天自在、大梵於三界自在。諸経或於俗諦自在、或於真諦自在、或於中道自在。但是歴別自在、非大自在。今経三諦円融最得自在譬大梵王。

当知、未顕真実四十余年所説衆経等、如彼諸王。他宗所依経諸経之王等、有一両句文、当分為王。故不名転輪王。已顕真実日所説法華経、如此転輪王。天台法華宗於衆経中最為其尊。（中略）当知、三十三天者他宗所依経。其帝釈王者天台法華宗。（中略）経與玄開合為顕王中王。其諸小王中輪王為最。三十三天帝釈為主。経別開故王之中王喩於法華。玄総合故二主之王喩於法華。是故不相違。明知、他宗所依経雖有一分仏

	第八喩	如二一切凡夫人中須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏為第一一、此経亦復如レ是（中略）有三能受二持是経典一者亦復如レ是。於二一切衆生中一亦為二第一一。
	第九喩	一切声聞・辟支仏中菩薩為第一一、此経亦復如レ是。
	第十喩	如二仏為諸法王一一、此経亦復如レ是。諸経中王。
		一切凡夫四果支仏第一者、此明二任運無功用一也。余経要因二功用一、乃得レ入レ流、如下四果人因二聞思修一方乃得上レ悟。此経明二無作四諦一、不レ雑二方便一。自然流二入薩婆若海一。（中略）声聞支仏菩薩為第一者、此明二因第一一也。余経明レ因是七方便。今経明レ因出二方便外一。故因第一也。如来第一者、此明レ果也。余経明レ果近在二寂場一。此経明レ果遠指二本地一。故最第一。
		余経抜二衆生一出二生死一、如下五仏子於二凡夫一第一上。或抜二衆生一出二涅槃一、如三菩薩居二無学上一。今経抜二出衆生一、過二方便教菩薩上一即成二法王一。最二為第一一。
母義一、然但有レ愛、闕二厳義一。天台法華宗具二厳愛義一、一切賢聖学無学及発二菩薩心一者之父。		当二レ知、他宗所依経未二最為第一一。其能持レ経者亦未二第一一。天台法華宗所持法華経最為二第一一。故能持二法華一者亦衆生中第一一。（中略）当二レ知、他宗所依経未二最為第一一。未顕真実故。天台法華宗固最為第一一。已顕真実故。（中略）当二レ知、仏者無上法王。法華無上妙典。明知、他宗所依経諸王所喩教。天台法華宗所依経、王中王所喩経。